書 評

ドイツ語による最近の禪の紹介書

特に H. Dumolin: Zen Geschichte und Gestalt・に就て

平 田 高 士

近時歐州に於ても禪研究が極めて盛んとなつて來た。中には誤つた譯語や紹介も所々に散見せられる。今此處でドイツ語による禪に關する最近の紹介書を二・三拾つてみる。㈠「禪の道」E, Herrigel: Der Zen-Weg. otto-wilhelm-Barth-Verlag. München-planegg 1958.㈡「禪の歷史と形態」H, Dumolin: Zen Geschichte und Gestalt. A, Francke Verlag. Bern 1959. ㈢「本質への突破」K, G, Dürkheim: Durchbruch zum Wesen. Max niehaus Verlag. Zürich 1954. ㈣「碧巖卅三則獨譯」W, Gundert, üb: Bl-YÄN-Lu. Carl Hanser Verlag. München 1960. 等がある。その中 H, Dumolin 著「禪の歷史と形態」に就て概略の紹介をしよう。著者は現在上智大學神學部教授である。先づ㈠原始佛教と小乘佛教に於ける神秘主義の要素㈡大乘佛教に於ける神秘主義㈢大乘經典と禪㈣支那佛教に於ける禪の先驅㈤初期の祖師方㈥支那禪の最盛期唐代㈦五家の宗風㈧宋代の禪の發展とその方法化㈨禪の日本への移入㈩道元禪師㈪室町期の禪の文化への影響㈫禪と基教の最初の出會㈬日本近代の禪㈭白隱禪，以上の十四章に於て禪の發展史を說いている。次にその形態に就て「その歷史に於ても示される如く禪は佛教と云う枝の多い一本の木の根幹である。而して禪の中核は悟であり云々」[1]と說き次に「悟の體驗」と云う項目に於て有名な禪僧（今北洪川老師等）の見性體驗の記錄を載せている。又「悟の心理學的說明」と云う項目に於て鈴木博士の初期の禪に關する論文がアメリカ宗教心理學派に負つている事を指摘，殊に Jame's Begriff der Unterbewusstsein（下意識の概念）を利用して禪を說明せんとしていると述べている。又彼は C, G, Jung との禪に關する仕事に於て東洋的思惟と「無意識の心理學」≪die Psychologie des Unbewusstsein≫ とを併用していると述べている。又西歐に於ては「心理療法」≪Psychotherapie≫ への期待が禪に對して大であると附加えている。而して畢竟

「心理學は禪の價値と必要性を說く爲の究極の言葉を語ることは出來ない」[2]と述べる。次に≪natürliche Mystik≫と云う語を以て禪の特色を示し基敎神秘主義と區別する。則ち≪die Gnade Mystik≫に對し禪は超自然≪Übernatur≫の恩寵によつてではなく，自己の內的力により絕體者との合一があると說く。又≪die übernatürliche Mystik≫に對する≪die natürliche Mystik≫たる禪の敎理に於ては一神論もあれば汎神論もある。此の點に就ては次の樣に推論する。それは「禪者は悟りの體驗を言葉に表わすことが出來ない。もしそれを傳えようとする時には大乘佛敎（哲學）の言葉に於てなされる」[3]と。然し「哲學と體驗は自ら異なつたものである」[4]。故に「その歸一の體驗は一神論的にも又汎神論的にも表現され得るのである」[5]と。畢竟「如何なる悟に至らんとする正しく且つ獻身的な純粹に人間的な努力も完全なる眞理へと導き得るものではない。只現世の人を照らす永遠のロゴスのみがそれへと導き得るものである」[6]と云つて禪に對し基敎的批評の言葉を以て結んでいる。

註一 Wie es sich in seiner Geschichte darstellt, ist das Zen ein Glied am vielzweigigen Baum des Buddhismus.……Doch ist der Kern des Zen das Erlebnis der Erleuchtung, das sogennante Satori. p 270

註二 Die Psychologie kann nicht das letzte Wort über Wert und Brauchbarkeit des Zen sprechen. p.279.

註三 Ihr Erlebnis vermögen sie nicht in Worten auszusprechen. Wenn sie dennoch das Erlebte mitzuteilen suchten, geschah es in der Sprache der Mahayana-Philosophie. p.288.

註四 Aber Philosophie und Erlebnis sind immer verschieden. p.288

註五 Die Erfahruug der Einheit kann sowohl theistisch als auch Pantheistisch gedeutet werden p.288

註六 Zur vollkommenen Wahrheit kann keine noch so aufrichtige, opfervolle, bloss menschliche Bemühung um Erleuchtung führen, sondern einzig der ewige Logos, der《in diese Welt gekommen jeden Menschen erleuchtet.》 p.288.